

明治中後期における近江商人 山中兵右衛門本家の投資活動

筒井正夫

はじめに

本稿の課題は、明治中後期（明治30～41年）における近江商人山中兵右衛門家本家の投資活動を検討することである¹⁾。滋賀県日野町出身の初代山中兵右衛門は、宝永元年（1704）現静岡県御殿場地方へ行商に出、享保3年（1718）6月、御厨御殿場の地に店を構え、日野屋本店を開業した。その後、19世紀の半ば頃までに御殿場（酒造）、小田原（酒造）、伊豆南条（醤油）、沼津（酒造）に次々と支店を開設していった²⁾。

本稿が対象とする明治30年代は、日本が日清戦後本格的な産業革命に突入していった時期であり、山中家が当主2代安太郎が、明治26年から春秋2回の決算には御殿場に出張して勘定の立会いほか各支店経営の改革を進め、本店並びに各支店の営業も発展し、「当家の家運は大旨順調な発展を遂げた³⁾」といわれている。

当主安太郎は、日野町本家に居を構え、江戸期のような商業活動は行わなかったものの、御殿場本店から上納される資金を元手に、周囲の著名な近江商人た

-
- 1) 山中家・日野屋山中商店の歴史については第9代当主がまとめた山中番樹『山中兵右衛門商店二百五十年史』同『株式会社山中兵右衛門商店二百六十年史』（以後『二百六十年史』と略記）があり、また松元宏「日野商人山中兵右衛門家の歴史」『地方史研究御殿場』9、2005年、が同家の歴史と経営の概要を簡潔にまとめている。山中家の研究としては、家政改革に焦点を当てた末永國紀「幕末維新时期山中兵右衛門家の支配人経営と家政改革」『近代近江商人経営史論』有斐閣第2章、1997年、が詳細な分析を行っているが、同家の株式投資の動向に焦点を当てた研究はまだ行われていない。
 - 2) 山中家の支店開設状況を関係市町村史その他の文献に拠りながら克明に跡づけたものとして、佐々木哲也「日野商人山中兵右衛門家の出店概要と史料構成」『地方史研究御殿場』9、2005年、がある。
 - 3) 『二百六十年史』82頁。

ちと協力してこの時期様々な企業活動や投資事業を展開している。

本稿がその実態解明を図るために主として分析対象とした史料は、『自明治参拾年度至大正9年度 別回シ資金勘定帳 他見ヲ禁ズ 山中本家』（以後『別回シ勘定帳』と略記する）である。この史料は、関東の各支店・本店の営業活動から得られた利益のなかから日野本家に送られてきた分を本家においてまさに「別廻し」で様々に運用してきた実態を記録したものである。その内容は、これから紹介するごとく株式などの投資活動が中心であるが、そうした投資行動は、もちろん本家に限ったことではなく、御殿場の本店においても活発になされている。したがって今回紹介するのは、山中家全体の投資活動のうち、日野本家においてなされた明治30年～41年の分に限られている。また『別回シ勘定帳』の史料には明治30年から大正9年まで記載しているが、それ以前の時期については、今回は詳らかになしえなかった。明治23年創業の日野製糸会社等へは、明治30年以前からの投資も当然考えられるが、それらの実態解明については、今後の課題としたい。

また『別回シ勘定帳』の史料は、「貸借対照表 資産之部・・・負債之部・・・損益勘定仕訳 利益之部・・・損失之部・・・」という順序で記載され、資産勘定と損益勘定を併記した西洋複式簿記の形式をとっていることが確認できる。ただし「本店ヨリ田畑収入金」は、損益計算書の「益金之部」に記載・計算され、そこで損失との差し引きによって出された「純益」が次年度貸借対照表の「負債」に前年度純益として計上されるはずであるが、そこでは年によって、改めて「本店ヨリ田畑収入」として計上され、「前年度純益」は、その額を差し引いた額が載せられている。ここでは、混乱を避けるため、前年度純益金としては「本店ヨリ田畑収入」を加えた額を表出している。

その全体は表1・2のとおりであるが、そこでは貸借対照表において資産＝

4) 例えば、明治40年における御殿場本店の株式等の投資は、日本鉄道10,500円（150株）、東京鉄道6,020円（旧50・新100株）、第百銀行19,080円（旧45株）、郵船株15,000円（150株）、北海道拓殖銀行9,548円（154株）、日本製粉125円（10株の内払込）、諸公債13,386円である（山中家史料「明治40年総勘定元帳」）。

負債＋期末資本（期首資本＋当期純益金），損益計算書において収益（益金）＝費用（損失）＋当期純益金の等式が成り立ち，複式簿記の要件を満たしている。

【1】山中本家の投資活動

それでは、『別廻シ勘定帳』の内容を表出した表1・2によって，当該期山中家の投資活動を分析しよう。

（1）明治30～33年（1897～1900年）

〔貸借対照表〕

1. 資産

この時期資産総額は，明治30年31,171円から33年43,543円へと順調に増加している。その割合は，明治33年の場合，公社債14.7%，株式76%，貸金4%，預け金5.4%と，株式投資が7割以上を占めている。

①公社債

まず公社債投資を見ると，総額は30年7,200円から33年6,400円に減少している。内訳は整理公債と軍事公債で5,000円余を保持し，京都平安紡績債券も2,000円所有していたが32年には1,400円に減じている。この京都平安紡績という会社は，明治28年資本金9万8千円で，京都の西陣織の呉服商が中心となって設立したものであった。山中家日野本家は，天明7年から綿屋勇藏，文化8年から美濃屋忠右衛門，天保2年から越前屋寅吉・井筒屋善右衛門等の京都糸問屋との取引を行っているが，そうした藩制期からの繋がりが，京都平安紡績への社債投資に連なっていたものと推測される。

②株式

この時期公社債の減少に反比例して急拡大したのが株式投資額であり，総額は，9社15,887円から13社33,003円へと倍増している。そして，その47%が日野製糸株式会社・日野綿布製織株式会社・日野銀行の地元3企業で占められていた。日野綿布株が360円・20株という小額のまま変わらないのに対し，日野製糸株は明治30年2,500円・100株から33年には4,825円・125株へと増加し，日野銀行

株も6,000円・330株から10,200円・340株へと拡大させている。

表3によってこれら3社の役員構成を見ると、山中安太郎・正野玄三（売薬、綿布商）・野田六左衛門（酒造、醸造業）・谷長右衛門（酒造、醸造業）・辻惣兵衛（陶器商）といった日野町出身の錚々たる近江商人が、社長あるいは頭取、取締役や監査役に就任しており、さらに日野綿布には中井源左衛門（絹綿布商その他）が、日野銀行には鈴木忠右衛門（酒造、醸造業）・竹村太左衛門（醸造業）も取締役や監査役に就いている。彼らは皆、江戸期から関東や東北その他へも手広く支店網を拡大していた有力な近江商人である。日野銀行の専務取締役を務める大澤兵四郎は、日野町の隣村北比都佐村出身で、明治34年に創設された日野運輸株式会社の取締役も兼務しているが、いわゆる他地域に進出して店舗展開をした近江商人的存在であったかどうかは詳らかではない。

要するに、江戸期以降関東その他広域に店舗開設をして繊維関連の商業活動や醸造業・製菓業等を展開していた近江商人が、明治中後期に産業革命の中核的産業であった綿業と製糸業に、まさに「乗り合い」で共同出資し、共に経営を支えあって事業展開していたのである。

日野綿布製織会社は、明治22年（1889）7月、製菓業を営む正野玄三によって創業された。正野家は、創業期のごくわずかの時期を除いて近世を通じて製菓業に専心してきたが、明治13年、7代玄三の長女が嫁ぐ大阪の呉服店岡田小八郎家が経営不振に陥り、同店を買受けて大阪支店を開業するとともに、隣家の木綿商佐渡屋との取引を通じて自らも木綿の取扱いを開始し、明治24年の「支店規則」では、木綿の方が売薬よりも上位に掲げられるほど木綿の売上高も順調に増加していった（明治19年2,203円、22年146,793円、24年230,322円）。また明治19年には大阪紡績に、25年には平野紡績（大阪住吉）への投資を開始し、同25年には、やはり岡田小八郎との関係から32,000円の巨費を投じて伊予紡績⁵⁾会社の創業に携わり社長として経営に参画している。

5) 以上の記述は、本村希代「明治期における近江商人の企業家活動—正野玄三家の事例—」『企業家研究』第2号、2005年、による。但し、同論文では、庄野家の木綿事業について大阪支店の業況や同家が深く関わった愛媛県伊予紡績会社の展開については

こうした正野家の熱心な木綿事業への取組みの一環として、地元日野に設立されたのが日野綿布製織会社であり、当初は社名を日野結城会社としていたことからわかるように木綿縞の製織を行っている。取締役には山中安太郎・岡吉兵衛・辻惣兵衛・木村彦兵衛が就き、監査役には野田六左衛門・井上伝八が就任している⁶⁾。

資本金は15,000円・株主数30人・職工70人で創業し、明治26年(1893年)頃までは払込金も10,200円に達し、職工も87人に増やして順調な進展をうかがわせるが、30年に職工数は49人、31年40人、32年32人と半数以下に減少している。株式払込金も31年には10,800円に留まっており、32年の益金もようやく93円を計上するのみであり(表4)、なんとか経営規模を縮小しながら持ちこたえていたと判断できよう。山中家はこうした正野家を中心とした綿布製織会社に取り締役として経営参加し、360円(20株)の投資を行っていたのであった。

次に日野製糸株式会社は、明治23年(1890年)3月、資本金5万円をもって設立された。創設当初の社長は詳らかではないが、明治27年時点では、日野町長で呉服商の小谷朝永が社長に就き、同31年には小谷が取締役に退いて谷長右衛門が社長に就任している。取締役に明治27年、谷長右衛門・野田六左衛門・伊藤捨吉の3名が、32年からは、小谷・伊藤に加えて日野綿布会社の取締役でもある辻惣兵衛が就任し、野田は監査役に回っている。その監査役には、山中安太郎と正野玄三が一貫して携わっていた。

日野町では、江戸時代中期に東北方面と生糸取引を行っていた中井源左衛門が優良品種の蚕種を日野に持ち帰ったことから養蚕が普及し、明治に入ってから16年には日野蚕糸社が設立されて養蚕製糸の技術指導が行われ、旧日野町の収繭高は明治11年4石、同18年12石、22年50石、24年79.2石・生糸169貫・

↙紹介されているが、日野において正野自身が社長を務めた日野綿布製織会社については、同家の株式投資額が挙げられているだけでほとんど触れられていない。

6) 以下日野綿布製織会社・日野製糸会社・日野銀行の役員については『日本全国諸会社役員録』による。

表1-1 山中本家別廻勘定帳の資産構成（明治30～41年）

| | | 明治30年 | 31年 | 32年 | 33年 |
|--------|---------------|------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 公社債 | 整理公債 | *5,200 | 3,100 | 3,000 | 3,000 |
| | 軍事公債 | | 2,000 | 2,000 | 2,000 |
| | 国庫債券 | | | | |
| | 京都平安紡績社債 | 2,000 | 2,000 | 1,400 | 1,400 |
| | 日本勸業銀債券 | | | | |
| | その他 | | | | |
| | 小計 | 7,200 | 7,100 | 6,400 | 6,400 |
| 2. 株式 | 日野製糸株 | 2,500(100) | 1,800(115) | 4,200(125) | 4,825(125) |
| | 日野綿布株 | 360(20) | 360(20) | 360(20) | 360(20) |
| | 真宗信徒生命保険株 | 250(20) | 250(20) | 250(20) | 250(20) |
| | 近江鉄道株 | 865(45) | 1,652.50(45) | 1,652.50(45) | 1,652.50(45) |
| | 同優先株 | | | | |
| | 日野銀行株 | 6,600(330) | 10,200(340) | 10,200(340) | 10,200(340) |
| | 近江銀行株 | | | | |
| | 北海道拓殖銀行株 | | | | 595(34) |
| | 日本酒造火災保険株 | 625(50) | 625(50) | 625(50) | 625(50) |
| | 横浜火災保険株 | 337.5(27) | 567.50(47) | 567.50(47) | 567.50(47) |
| | 日本勸業銀行株 | 350(7) | 350(7) | | |
| | 京都平安紡績株 | 4,000(215) | 5,075(215) | 7,225(215) | 9,375(215) |
| | 八幡銀行株 | | 372.75(旧5) | 372.75(5) | 372.75(5) |
| | 大阪電燈株 | | | 494(10) | 494(10) |
| | 大阪第三十銀行株 | | | 3,437(60) | 3,437(60) |
| | 北海道函樽鉄道株 | | | 50(50) | 250(50) |
| | 日野運輸株 | | | | |
| 京釜鉄道株 | | | | | |
| | 小計 | 15,887.5 | 21,252.75 | 29,433.75 | 33,003.75 |
| 3. 貸金 | 大澤兵四郎 | 1,000 | 1,000 | | |
| | 守村宗米 | | | | 200 |
| | 藤岡伝兵衛 | | | | 600 |
| | 田中知邦 | | | | 1,000 |
| | 畑治七 | | | | |
| | 外池芳造 | | | | |
| | 安井要蔵 | | | | |
| | 関谷末吉 | | | | |
| | 竹村猪兵衛 | | | | |
| | 岡田宗太郎 | 4,000 | | | |
| | 高井作次郎 | | | | |
| | 日野製糸会社 | | | | |
| | 日野銀行清算事務所 | | | | |
| | | 小計 | 5,000 | 1,000 | |
| 4. 預け金 | 観風社積立預金 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| | 日野銀行通知預け金 | 2,500 | 1,000 | | |
| | 日野銀行小口当座預け金 | 445 | 580 | 1,070 | 2,231.38 |
| | 八幡銀行支店 | | | | |
| | 近江銀行日野支店 | | | | |
| | 近江銀行支店小口当座預け金 | | | | |
| | | 小計 | 3,045 | 1,680 | 1,170 |
| 5. その他 | 地所買入代 | | | | |
| | 日野銀行補填 | | | | |
| | 小計 | | | | |
| 6. 現在金 | 現在金 | 2,769 | 2,997 | 12,827 | 8,232 |
| | 滋賀県農工銀行証標金 | 36 | | | |
| | 小計 | 38,769 | 2,997 | 12,827 | 8,232 |
| 合計 | | 31,171.269 | 34,035.747 | 37,016.577 | 43,543.362 |
| 備考： | | 整理・軍事 | | | |
| 各年次*印 | | 公債合計 | | | |

出典：山中兵右衛門家『自明治30年度至大正9年度別廻資金勘定帳』より作成。

明治中後期における近江商人山中兵右衛門本家の投資活動 137

| 34年 | 35年 | 36年 | 37年 | 38年 | 39年 | 40年 | 41年 |
|--------------|--------------|----------------|----------------|----------------|------------------------|------------|---------------------------|
| 4,500 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | 1,940 |
| 500 | | | | | | | 10,017 |
| 1,400 | 1,400 | 2,000 | 2,000 | | | | 20 |
| | 40 | 20 | 20 | 20 | 20 | 20 | *900 |
| 6,400 | 2,940 | 3,520 | 3,720 | 1,520 | 1,520 | 1,520 | 12,377 |
| 4,825(125) | 4,825(125) | 2,480(62) | 2,480(62) | | | | |
| 360(20) | | | | | | | |
| 250(20) | | | | | | | |
| 1,652.50(45) | 1,652.50(45) | 1,652.50(45) | 1,100(22) | 1,950(39) | 702(39) | 702(39) | 702(39) |
| 525(35) | | 1,400(35) | 1,750(35) | | | | |
| 13,600(340) | 20,150(400) | 20,150(400) | 20,150(400) | 10,125(405) | 1,620(36) | | |
| | | | | | | 390(新12) | 390(新12) |
| 1,190(34) | 1,190(34) | 1,530(34) | 1,700(34) | 1,700(34) | 1,700(34) | *2,125(68) | **2,125(68) |
| 625(50) | 625(50) | 625(50) | 625(50) | 625(50) | | | |
| 567.50(47) | 567.50(47) | 567.50(47) | 567.50(47) | 567.50(47) | | | |
| | | | | | | | |
| 6,500(150) | 6,500(150) | 6,500(150) | 6,500(150) | | | | |
| 372.75(5) | 372.75(5) | 372.75(5) | 372.75(5) | 372.75(5) | 372.75(5) | 372.75(5) | 372.75(5) |
| 544(10) | 594(10) | | | | | | |
| 3,437(60) | 3,437(60) | 3,437(60) | 3,437(60) | 1,500(60) | 900(30) | 900(30) | 900(30) |
| 250(50) | 750(50) | 1,750(50) | 2,500(50) | 2,500(50) | 1,500(50) | 1,500(50) | 1,500(50) |
| 100(5) | 150(5) | 150(5) | 150(5) | 150(5) | 150(5) | 150(5) | 150(5) |
| 30(30) | 150(30) | 300(30) | 600(30) | 900(30) | 900(30) | 900(30) | |
| 34,828.75 | 40,963.75 | 40,914.75 | 41,932.25 | 20,390.25 | 7,844.75 | 6,039 | 6,139.75 |
| | | | | | | 4,007.225 | 4,007.225 |
| 200 | 200 | 200 | 200 | 200 | 200 | 200 | 200 |
| 600 | 600 | 550 | 322.88 | 322.88 | 322.88 | 322.88 | 322.88 |
| 1,000 | 1,000 | 1,000 | 1,000 | 1,000 | 1,000 | 1,000 | 1,000 |
| | 200 | 200 | 200 | 200 | 200 | 200 | 200 |
| | | | | 150 | 150 | 150 | 150 |
| | | | | | 60 | 60 | 60 |
| | | | | | 200 | 200 | |
| | | | | | 80 | 80 | 80 |
| | | | | | | 38 | 38 |
| | | | | | | | 1,500 |
| | | | | | | | 2,450 |
| 1,800 | 2,000 | 1,950 | 1722.88 | 1,872.88 | 2,212.88 | 6,258.105 | 10,008.105 |
| 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| | | *2,652.83 | *2617.83 | *2,617.83 | *44,662.50 | | |
| 1,162.26 | 1,846.25 | 1,304.47 | 1701.13 | 1,528.61 | | | |
| | | | | 1,500 | 3,000 | 3,000 | |
| | | | | | 1,500 | | |
| | | | | | 2,913.69 | 230.14 | 2,707.8 |
| 1,262.26 | 1,946.25 | 4,057.3 | 100 | 5,746.44 | 52,176.19 | 3,330.14 | 2,807.8 |
| | | | | | | 4,774 | |
| | | | | | | 44,562.5 | 44,562.5 |
| | | | | | | 49,336.5 | 44,562.5 |
| 18.399 | 29.419 | 92.211 | 139.806 | 107.866 | 78.436 | 55.562 | 50.106 |
| | | | | | | | |
| 18.399 | 29.419 | 92.211 | | 107.866 | 78.436 | | |
| 44,309.409 | 48,929.419 | 50,534.261 | 51,733.896 | 29,637.436 | 63,832.256 | 67,590.057 | 77,445.261 |
| | | 平安紡績敷地 競売代金 | 平安紡績敷地 競売代金 | 平安紡績敷地 競売代金 | 日野銀行へ補填出金 44,562.5円 | 内新株425(34) | 元京釜鉄分5利公債 **内新株425(34) |

表1-2 負債および資本（明治30～41年）

| | | 明治30年 | 31年 | 32年 | 33年 |
|--------------|--------------|------------|------------|------------|------------|
| 1.負債 | 本店より借入金 | 8,600 | 8,600 | 8,600 | 10,000 |
| | 善種売却積立金より借入 | | | | 700 |
| | 同上より借入 | | | | 400 |
| | 主人手元金より借入 | | | | |
| | 本店別回し口より一時借入 | | | | |
| | *大澤兵四郎殿より | | | | |
| | 藤岡伝兵衛殿より | | | | |
| | 近江銀行より借入 | | | | |
| 小計 | | 8,600 | 8,600 | 8,600 | 11,100 |
| 2.期末資本 | 期首資本金 | | 22,571.269 | 24,435.747 | 28,416.577 |
| | 当期純益金 | | 1,864.478 | 2,980.830 | 4,026.785 |
| 小計 | | 22,571.269 | 25,435.747 | 28,416.577 | 32,443.362 |
| 合計 | | 31,171.269 | 34,035.747 | 37,016.577 | 43,543.362 |
| 備考： 各年次*印 | 日野銀行売戻代金の預かり | | | | |

出典：同前史料より作成。

屑糸49貫と伸びていった。⁷⁾

こうした養蚕製糸業の成長を背景として大字松尾で操業を開始した日野製糸工場は、明治23年当初は、株式払込金が6,800円に留まっていたこともあってか、職工47人・40釜でスタートしたが、24年には大字大久保に移転し、翌25年には80釜に増加している。

大字大久保では蚕業奨励規則を定め、大久保出身の日野町長で社長を務めていた小谷朝永の尽力か、日野製糸会社に対し共有金のうちから6,803円の補助を与えている。⁸⁾ こうした援助を得て払込金額は26年には20,000円、32年は35,000円へと増加していった。職工人数もそれぞれ明治26年100人、32年120人と増加し、利益金も32年には3,541円を計上している（表5）。生糸製造高も、明治27年699,974匁から同28年863,361匁、30年1012,900匁、31年1144,000匁（釜数100）へと急速に発展していった。その規模は、近江製糸場（長浜、279万匁）、

7) 「第4章日野町」『滋賀県市町村沿革史』第三巻第五編、276頁。

8) 同上。

| 34年 | 35年 | 36年 | 37年 | 38年 | 39年 | 40年 | 41年 |
|------------|------------|------------|------------|------------|---------------|---------------|---------------|
| 10,000 | 10,000 | 10,000 | 10,000 | 10,000 | 12,650 | 17,504.743 | |
| 700 | 700 | 700 | 700 | 700 | 1,100 | 2,400 | 2,400 |
| 400 | 400 | 400 | 400 | 400 | | 1,500 | 1,500 |
| 800 | 800 | 500 | | | | | |
| | 2,000 | 2,650 | 2,650 | 2,650 | *24,625 | | |
| | | 250 | | | | | |
| | | 125.62 | | | | | |
| | | | | | *20,000 | *20,000 | *20,000 |
| 11,900 | 13,900 | 14,625.62 | 13,750 | 13,750 | 58,375 | 41,404.743 | 23,900 |
| 32,443.362 | 32,409.409 | 35,029.419 | 35,908.641 | 37,983.896 | 15,887.436 | 5,457.256 | 26,185.314 |
| △33.953 | 2,620.001 | 879.222 | 2,075.255 | △22,096.46 | △10,430.18 | 20,728.058 | 27,359.947 |
| 32,409.409 | 35,029.410 | 35,908.641 | 37,983.896 | 15,887.436 | 5,457.256 | 26,185.314 | 53,545.261 |
| 44,309.409 | 48,929.419 | 50,534.261 | 51,733.896 | 29,637.436 | 63,832.256 | 67,590.057 | 77,445.261 |
| | | | | | 日野銀行 補填のため | 日野銀行 補填のため | 日野銀行 補填のため |

山中製糸場（彦根，142万匁），近江住友製糸場（坂田郡醒井，136万匁⁹⁾）に次ぐものであり，県下有数の製糸工場の一つとってよからう。

山中家はこうして発展する日野製糸会社の監査役として，明治30年時点で2,500円（100株），32年には4,200円（125株）を投資して支えていったのである。

そして山中家自身を中心となってこれら企業を資金面で支えるために設立したのが日野銀行であったと思われる。山中安太郎は，明治29年8月，資本金20万円をもって同行を創設し，頭取に就任している。専務取締には北比都左村の大澤兵四郎が就き，取締役には竹村太左衛門・谷長右衛門・藤沢茂右衛門（醸造業，明治28～32年南比都佐村長），監査役には正野玄三・鈴木忠右衛門・野田六左衛門という錚々たる近江商人が名を連ねている。

この時期の業況をみると株式は明治30年（1897）8,000円から32年（1899）には12,000円まで振り込まれ，預金高も同期間に定期預金は110,439円（上半期・

9) 『滋賀県実業要覧』『滋賀県市町村沿革史』（資料編二）344頁。

下半期それぞれの合計値）から220,704円へ倍増し、当座預金も10万円前後（同）を保っている。預金額はそのほか小口当座預金が306,207円と多額にあり、さらに振出手形・別段預金等を加えると明治30年の預金総額は553,486円となる。貸金も30年384,976円から32年571,387円へと1.5倍に増加し、当座預金貸越も47,142円から766,623円へと1.6倍に増やしている（表6）。また「当行は、・・為替方を拝命し公金預金も取り扱い¹⁰⁾」と言われるが、『滋賀県統計全書』の記述では、日野銀行の「官金及公金」の「預り金」欄に記載は無く、手形業務での公金送金においてわずかに半期200円台（明治31年）を数えるにすぎない。

ここで、山中家に残された『明治三十拾年壹月 日誌 株式会社日野銀行』によって、日野銀行の業況の一端を探ってみよう。まず貸付で注目されるのは、次のような日野製糸会社への融資関連の記述である。

二月十九日 伊藤氏へ金壹千円ヲ貸付出来、担保ハ製糸株ナリ

三月廿七日 伊藤氏来店、日野製糸会社五千円口返却并ニ小谷氏参千円口壹千五百円ヲ内入返済相成度、手形式枚ニテ内壹枚ハ八日市八幡銀行支店渡ニ付打手トシテ近江商業銀行へ亦壹枚ハ同行本店渡ニ付当行江当座口へ記帳ノ為夫々書面發送ス

九月六日 一 当座貸越約定ニ付 但シ製糸会社及大塚新吉殿トス

ここに見る伊藤氏とは日野製糸会社取締役伊藤捨吉氏であり、小谷氏は社長小谷朝永氏であろう。1,000円、5,000円、3,000円と、かなりまとまった大きな金額が貸出されており貸付先としても最大手であったことがわかる。9月6日には恒常的な大口貸出を可能とするために当座貸越の約定を結んでいる。また返済には、手形で八幡銀行八日市支店や近江商業銀行が利用されている。

そのほかの貸出先をみると、1,000円～3,000円のお大口貸出が多く、明治32年から日野製糸会社の取締役になり、36年からは日野銀行の専務取締にも就く辻惣兵衛と見られる人物に1,000円の多額が貸付られ、著名な近江商人である山中利右衛門からは返済の延期書が提出されており、同人への貸出しが確認できる。

10) 瀧上清二著『近江商人の金融活動と滋賀金融小史』サンライズ出版、2005年、88頁。

小口当座預金の申し込みなどの記載も見られるが、こうした大口・小口の貸出しを行っていくための資金繰りはかなり大変だったようで、2月10日には1,000円、同15日には1,150円の貸出しを控えて、10日には「本日金庫欠乏残高九百十四余ニ付二時四十分ニテ閉店」という状況であった。この日手代の吉井氏は、八幡銀行へ出向き翌11日2,900円を持ち帰り、13日には専務取締役の大澤氏が「金五千円携帯、大阪ヨリ帰行」している。「大阪」とは取引が頻繁な大阪第百三十銀行のことであろう。

このような諸銀行からの資金融通も頻繁に行われている。3月11日の記述にも「午後五時ヨリ京都へ安田手代出張、商工銀行ニテ九千五百円ヲ為替金受取候、近江銀行へ九百円、日本産業へ壹千円、大坂百三十銀行ノ分ヲ京都支店江壹千円振込、翌十二日午後二時三十分帰行」とあり、京都商工銀行、近江銀行、日本産業銀行、大阪百三十銀行との資金融通が確認できる。

こうした他銀行との提携については、滋賀県内では正野玄三が取締役や監査役を務める八幡銀行、彦根・高宮・五箇荘方面の豪商が経営する近江商業銀行がもっとも頻繁に登場するが、水口町の近江興業銀行や甲賀郡の寺庄銀行とも連携している。京阪神地域では、大阪第百三十銀行や山中利衛門が取締役にあった京都商工銀行、また京都三井銀行、京浜地方では東京第百銀行や横浜第二銀行、また生糸売込商原善三郎と為替取決めの交渉も確認できる。そのほか取締役竹村太左衛門ほか多くの日野町出身商人が江戸期より出店している北関東（群馬・栃木）地方においても、深谷銀行・足柄四十一銀行と提携を持っている。これら諸銀行の中で、深谷銀行・横浜第二銀行・足柄四十一銀行・寺庄銀行とはいわゆるコルレス契約を締結している。

また10月22日・28日の記述には「正野氏ヨリ一時借入」「正野氏ニテ例之通二千元借入」とあり、正野玄三が多額の資金援助を行っていたことも判明する。ただし、その正野家も明治27年8月に山中家により5,000円という多額の借入れを行い、31年になっても返金できていないことが、山中家「弁店勘定細見帳」より判明するので、結局は山中家の資金援助に頼っていたことになる。

表2 山中本家別廻勘定帳の損益計算書

| | | 明治31年 | 32年 | 33年 | 34年 | 35年 |
|------------------|-------------------------|----------|-----------|-----------|---------------------|---------------------|
| 益 金 之 部 | 1. 公社債利子 | 582.5 | 414.05 | 382.2 | 382.2 | 227.85 |
| | 国債償還 | | | | | |
| | 2. 株式配当 | | | | | |
| | 日野綿布会社 | 14.4 | | 4 | | |
| | 日野製糸会社 | | | 1,000 | | |
| | 近江鉄道会社 | | | 33.75 | 7(優先株) | 58.45(同) |
| | 真宗門徒生命保険会社 | 17.5 | 17.5 | 17.5 | 20 | |
| | 日本酒造保険会社 | 37.5 | 50 | | | |
| | 横浜火災保険会社 | 16.93 | 41.12 | 49.93 | 54.05 | 58.75 |
| | 京都平安紡績会社 | 64.5 | | 393.45 | 103.2 | |
| | 大阪電灯会社 | | 26.25 | 59.5 | 68.25 | 78.5 |
| | 鉄道運輸関係諸会社 ¹⁾ | | | | | |
| | 日野銀行 | 643.5 | 816 | 816 | 907.8 | 1,224 |
| | 八幡銀行 | 12.5 | 25 | 27.5 | 30 | 42.5 |
| | 大阪第百三十銀行 | | | 285 | 270 | 240 |
| | 日本勸業銀行 | 16.98 | 8.75 | | | |
| | 北海道拓殖銀行 | | | | 43.13 | 86.19 |
| | 近江銀行 | | | | | |
| | 小計 | 823.81 | 984.62 | 2,686.63 | 1,503.43 | 1,788.39 |
| 3. 貸金利子並雑収入 | 586.808 | 714.54 | 74.645 | 135.025 | 277.334 | |
| 4. 本店ヨリ田畑所得金収入 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | 1,500 | |
| 5. 雑収入 | | | | 6.5 | 212.75 | |
| 6. 本店より限度外資本為登 | | | | | | |
| 7. 合計 | 3,493.118 | 3,613.21 | 4,643.475 | 3,527.155 | 4,006.324 | |
| 損 失 之 部 | 1. 本店へ現金利子支払 | 623 | 602 | 602 | 683.66 | 852.52 |
| | 2. 配当金受手数料 | 5.64 | 4.31 | | | |
| | 3. 株売買価格損失 | | 11 | | 2,875 ³⁾ | 532.5 ⁴⁾ |
| | 4. 日野銀行借入金利子 | | 15.07 | 14.33 | | |
| | 5. 株式払込諸費 | | | 0.36 | | |
| | 6. 雑費 | | | | 2.448 | 1.294 |
| | 7. 計 | 628.64 | 632.38 | 616.69 | 3,561.108 | 1,386.314 |
| 純益：益金合計－損失合計 | 2,864.478 | 2,980.83 | 4,026.785 | △33.953 | 2,620.01 | |

出典：同前史料より作成。

注：1) 36年は京釜鉄道・北海道箱根鉄道・大阪電灯会社の合計，37年・38年は京釜・北鉄・日野運輸会社の合計，39年・40年・41年は京釜・日運の合計。2) 株式売却その他。3) 平安紡績株減資切捨。4) 公債売却価格損失，綿布会社解散に付損失。5) 日野製糸株減資の損失。6) 近江鉄道旧株減資の損失。7) 平安紡績社債・株切捨，日野製糸株切捨，近江鉄道株切捨，日野銀行減資切捨，百三十銀行株切捨。8) 日野銀行補填損失，近江鉄道株切捨，北海道鉄道株切捨，百三十銀行株切捨。9) 大澤氏との関係の為地所買入損失。10) 大澤氏と関係の為地所売却損失

| 36年 | 37年 | 38年 | 39年 | 40年 | 41年 |
|---------------------|---------------------|------------------------|----------------------|-------------------------|-------------------------|
| 75.46 | 74.48 | 74.48 | 74.48 | 74.48 | 130.73 |
| | | | | | 65.5 |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 70 | 70 | 39 | | | |
| | | | | | |
| 50 | 62.5 | 62.5 | 62.5 | | |
| 58.75 | 58.75 | 58.75 | 70.05 | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 132 | 141 | 121.35 | 55.5 | 64.5 | 53.98 |
| 1,400 | 1,150 | 1,000 | | | |
| 80 | 30 | 30 | 33.75 | 37.5 | 37.5 |
| 225 | 90 | | | | |
| | | | | | |
| 102 | 122.4 | 132.6 | 153 | 170.34 | 191.08 |
| | | | | 11.256 | 30 |
| 2,117.75 | 1,724.65 | 1,444.2 | 374.8 | 283.596 | 312.56 |
| 44.44 | 76.75 | 114.85 | 495.82 | 158.63 | 358.26 |
| 1,500 | 1,500 | 1,500 | | | |
| 296 | | | 1,976 ²⁾ | | |
| | | | | 23,134.257 | 32,676.167 |
| 4,033.65 | 3,375.88 | 3,133.53 | 2,921.55 | 23,934.559 | 33,543.217 |
| 784.01 | 749.955 | 1,191.37 | 1,768.08 | 1,423.6 | 1,687.8 |
| | | | | | |
| 2,370 ⁵⁾ | 550.3 ⁶⁾ | 24,033.2 ⁷⁾ | 11,581 ⁸⁾ | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 0.418 | | 5.42 | 2.65 | 1,499.305 ⁹⁾ | 4,495.47 ¹⁰⁾ |
| 3,154.428 | 1,300.625 | 25,229.99 | 13,351.73 | 2,922.905 | 6,183.27 |
| 879.222 | 2,075.255 | △22,096.46 | △10,430.18 | 20,728.058 | 27,359.947 |

こうして山中安太郎は近江商人系の諸銀行と連携しながら、日野製糸会社にも多額融資を行っていた日野銀行の頭取として、6,000円～10,000円もの株投資を行って同行を支えていたのである。この額はこの時期の株式投資額全体の30%～48%を占めていた。

以上日野町3企業の業況と山中家の株式投資を見てきたが、その他の地域では、滋賀県内では、前述のように正野玄三が取締役に就き日野銀行の資金融通でも緊密な連携を保っていた八幡銀行株を、明治31年以降372.75円（旧5株）所持している。また正野玄三・中井源左衛門・小林吟右衛門・下郷伝平らの近江商人と大東義徹・西村捨三・林好本ら旧彦根藩士族の政治家達が発起人となり、明治29年に設立された近江鉄道会社にも30年865円（45株）を保持しており、31年以降は1652円に上昇している。

京都方面では、伊藤忠兵衛も創業者に参画し明治29年西本願寺を背景に企業銀行とともに設立された真宗信徒生命保険会社¹¹⁾に250円（20株）を出資している。前述のように社債を多く購入していた平安紡績会社の株式も明治30年4,000円（215株）を保持していたが、年々株価が上昇し33年には9,375円にまで達している。大阪方面では、日野銀行への資金融通でも登場した大阪第百三十銀行へ、明治32年から3,437円（60株）とかなり多額の投資を行い、また同年から大阪電灯会社へも494円（10株）を投資している。

そのほか近江商人が江戸期から進出した北海道方面では、北海道函樺鉄道会社に32年50円（50株）、33年250円（同）を、また北海道拓殖銀行へは33年から595円（34株）の投資を開始し、酒造関連では明治30年より日本酒造火災保険会社へ625円（50株）ずつ保持しており、横浜火災保険や日本勧業銀行にも300円～500円台の投資を行っている。

このように、この時期山中家は、日野銀行や日野製糸を中核とした地元日野の会社や近江・京都方面の近江商人関連会社、さらには大阪・北海道等にも手広く広げて株式投資を拡大していったのである。

11) 同上書、160頁。

③貸金

明治30年（1897）日野銀行専務取締役の大澤兵四郎に1,000円の貸金があるほか、岡田宗太郎にも4,000円という多額を貸付けている。しかし、大澤への貸金は32年に、岡田へのそれも31年に消滅しており、返済されたものと思われる。

④預け金及び現在金等

明治30年日野銀行へ通知預金を2,500円保持していたが、31年には1,000円に減額させている。他方同行への小口当座預金は30年445円から33年には2,231円に増加させており、自らが経営する日野銀行を預金面でも支えていたことがわかる。

また、明治23年日野町松尾に結成された能楽の寒風社に、毎年100円預け金を保持している。そのほか手持ちの現在金は、毎年2円～12円余のわずかな金額である。

2. 負債及び資本

この時期負債として現れるのは本店からの借入金であり、明治30～32年には8,600円であったが、翌33年には10,000円に増加している。いつからこの借入金が始まったのかは未確認であるが、これが原資となって株式等への投資が展開されていったと推測される。

当年度資産から負債を引いた額が期末資本となり、次年度の期首資本となるが、その額は明治30年22,571円から年々増加して33年には32,443円まで増加している。また期末資本から期首資本を引いた当期純益金も、明治31年2,864円、32年2,980円、33年4,026円と順調に増大していったことが確認できる。

〔損益計算書〕

「益金之部」をみると、まず公社債利子が、毎年投資額の6%～8%の割で着実な利益を上げている。株式配当では、日野綿布・日野製糸・平安紡績・近江鉄道・日本酒造保健などの会社は、年によっては配当が支払われない場合もあり不安定である。日野綿布もわずかに18円余の低収益であり、京都平安紡績は、投資額は日野製糸の倍以上であるにもかかわらず、配当は457円余に留まってお

表3 日野綿布・日野製糸・日野銀行3社の役員構成
明治27～36年

| | 日野綿布製織 | 日野製糸 | 日野銀行 |
|--------|--------|------|------|
| 山中安太郎 | ○ | □ | △ |
| 正野玄三 | △ | □ | □ |
| 野田六佐衛門 | □ | ○・□ | □ |
| 谷長右衛門 | | ○・△ | ○ |
| 辻惣兵衛 | ○ | ○ | ◎ |
| 中井源左衛門 | ○ | | |
| 鈴木忠右衛門 | | | □ |
| 竹村太左衛門 | | | ○ |
| 大澤兵四郎 | | | ◎ |

出所：各年次『日本全国諸会社役員録』

注：△社長又は頭取，◎専務取締役，○取締役，□監査役

表4 日野綿布製織会社の展開

| | 資本金 円 | 同払込高 円 | 株主数 人 | 職工人員 人 | 年間就業日数 日 | 益金 円 |
|------|--------|--------|-------|--------|----------|--------|
| 明治23 | 15,000 | 6,000 | 30 | 70 | | |
| 24 | 15,000 | 6,800 | 29 | 75 | | |
| 25 | 15,000 | 10,200 | 24 | 87 | | |
| 26 | 15,000 | 10,200 | 24 | 87 | | |
| 27 | 15,000 | 10,200 | 31 | 48 | | |
| 30 | 15,000 | 10,800 | 25 | 49 | | |
| 31 | 15,000 | 10,800 | 26 | 40 | | |
| 32 | 15,000 | 10,800 | | 32 | 330 | 93 |
| 33 | 15,000 | 10,800 | | 42 | 330 | △63 |
| 34 | 15,000 | 10,800 | | 32 | 330 | △1,076 |
| 35 | | | | 18 | 330 | |
| 36 | | | | 18 | | |

出所：各年次『滋賀県統計全書』

注：明治35年より，職工数・年間就業日数のみ判明。

表5 日野製糸会社の展開

| | 資本金 円 | 同払込高 円 | 生産額 匁 | 蒸気機関(馬力) | 職工人員 人 | 年間就業日数 | 利益金 |
|------|--------|--------|-----------|----------|--------|--------|---------|
| 明治23 | 15,000 | 6,800 | | 1(3.5) | 47 | | |
| 24 | 15,000 | 6,800 | | 1(3) | 50 | | |
| 25 | 15,000 | 6,800 | | 1(3) | 90 | | |
| 26 | 50,000 | 20,000 | | 1(3) | 100 | | |
| 27 | 50,000 | 20,000 | 699,974 | 1(3) | 114 | | |
| 28 | | | 863,361 | | | | |
| 30 | 50,000 | 25,000 | 1,012,900 | 1(4) | 117 | | |
| 31 | 50,000 | 25,000 | 1,144,000 | 1(0,4) | 120 | | |
| 32 | 50,000 | 35,000 | | 1(4.9) | 120 | 281 | 3,541 |
| 33 | 50,000 | 40,000 | | 1(5) | 115 | 292 | 10,981 |
| 34 | 50,000 | 40,000 | | 1(4.9) | 115 | 300 | △15,881 |
| 35 | 50,000 | 50,000 | | | 85 | 174 | |
| 36 | 30,000 | 20,000 | | | 55 | 284 | |
| 37 | 30,000 | 20,000 | | 1(5) | 52 | 270 | |

出所) 各年次『滋賀県統計全書』より作成。但し、明治27年～31年の生産額は『滋賀県実業要覧』による注)・空欄は不明箇所

表6 日野銀行の展開

| | 資本金 | | 預金 | | | | 貸付金 | | | |
|------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | 資本金 | 同払込金 | 定期 | | 当座 | | 貸付金 | | 当座預金貸越 | |
| | | | 1年間 | 年末 | 1年間 | 年末 | 1年間 | 年末 | 1年間 | 年末 |
| 明治30 | 200,000 | 80,000 | 110,439 | 48,116 | 102,275 | 6,128 | 384,976 | 118,605 | 47,142 | 8,319 |
| 31 | 200,000 | 120,000 | 177,892 | 67,274 | 81,056 | 9,743 | 497,791 | 129,741 | 75,933 | 14,393 |
| 32 | 200,000 | 120,000 | 220,704 | 77,071 | 107,001 | 19,849 | 571,387 | 135,937 | 76,623 | 13,774 |
| 33 | 200,000 | 120,000 | 105,801 | 98,327 | 536,215 | 138,940 | 294,686 | 133,077 | 78,185 | 160,066 |
| 34 | 200,000 | 160,000 | 116,443 | 109,434 | 585,733 | 280,709 | 284,165 | 173,023 | 172,219 | 58,087 |
| 35 | 200,000 | 200,000 | 116,687 | 109,119 | 671,108 | 163,119 | 144,013 | 198,638 | 210,599 | 64,278 |
| 36 | 200,000 | 200,000 | 155,063 | 103,193 | 600,207 | 158,496 | 119,286 | 213,105 | 186,259 | 43,508 |
| 37 | 200,000 | 200,000 | 57,788 | 83,122 | 830,458 | 177,513 | 99,260 | 196,867 | 259,737 | 70,568 |
| 38 | 200,000 | 200,000 | | | | | 100,028 | 194,056 | 134,431 | 48,696 |
| 39 | 70,000 | 70,000 | | | | | 84,695 | 40,038 | 133,406 | 17,081 |

出所) 各年次『滋賀県統計全書』より作成。

注)・預金及び貸付金の「1年間」の金額は、明治30～32年は上半期と下半期の合計値で、同33年以降の数値とは直接つながらない。

・空欄は不明箇所。

り、近江鉄道も、経営不振が続く中、33年に33円余を配当するのみであった。そうしたなか日野製糸は31・32年と無配当であったが、33年には1,000円の高収益をもたらしている。

これらに比べ、日野銀行はこの期643円～816円と8～9%の高配当をもたらしており、株式配当の中では最も安定した収入源であった。

貸金利子及び雑収入も31年586円、32年714円と高い収益を示している。

そして「益金」の項目中最も多額で安定した収益を示しているのが、「本店ヨリ田畑所得収入」であった。この項目を、御殿場本店で支店を含む総勘定を決済した帳簿『自明治三十年十月 至大正9年12月 主人限出店勘定帳』によって確認すると、損益計算書に当たる部分の「支出ノ部」のなかに「趣段金内国元登為金」の項目があり、毎年1,500円が支出されていることが確認できる。これが本家の側では「本店ヨリ田畑所得収入」として記載されていたのであった。山中家は御殿場本店において御殿場周辺に約29町歩の小作地を持っており、そこからの収益が趣段金として本家国元に送金され、これが株式ほかの投資活動に用いられていたのである。

次に「損失之部」を見ると、ほとんどが本店からの借入金の利子であり600円余を毎年計上している。そのほか株式配当金受取手数料や銀行借入金利子があるが微々たる金額である。こうして純益金（「益金」－「損失」）は前述のように、この時期2,864円から4,026円へと増大していったのである。

（2）明治34年～39年（1901年～1906年）

〔貸借対照表〕

1. 資産

この時期資産総額は、明治34年（1901）44,309円から37年（1906）51,733円まで漸増するが、38年に29,637円に激減し、39年にはふたたび63,832円に急回復するという一見奇妙な推移を示している。何故そのような推移をたどり、そこにどのような内実が隠されていたのかを順次検討しよう。

①公社債

公社債総額は、明治34年6,400円をピークに、35年2,940円、38年・39年には1,520円にまで減少している。35年には軍事公債を手放し、整理公債も3,000円を減少させて、公債合計額は1,500円に減少している。また34年に1,400円持っていた京都平安紡績の社債も36年・37年には2,000円に増加した後、38年以降消滅している。明治33～34年の恐慌は、紡績業の過剰資本に誘発された本格的な資本主義恐慌であったが、平安紡績も34年には多額の債務を発生させて業況不振に陥り、¹²⁾38年には債務を返済できないまま経営困難に陥っている。こうして公社債資産は、大きく減じたのである。

②株式

株式保有額も、明治34年（1901）34,828円から37年（1904）には41,932円まで漸増するが、38年（1905）には20,309円に、そして39年（1906）には7,844円にまで激減している。

まず日野関連の会社から見ていこう。日野綿布株は、34年360円（20株）を持っていたが、翌35年には消滅している。おそらく33年～34年恐慌を乗り切れなかったであろう。34年には1,076円の損失を出し、翌35年には職工を32人から18人に減らし、¹³⁾35年には解散している。

次に日野製糸会社も34年恐慌時には、15,881円もの損失を計上して大きな打撃を蒙っており、115人を数えた職工数も翌35年には85人、36人には55人にまで減らしている。同社では、明治36年5月に臨時株主総会を開き、資本金を5万円から3万円に2万円減資し、損失償却金に充てることを決定している。¹⁴⁾この時取締役である山中家の持株も35年4,825円（125株）から36年2,480円（62株）に半減させている（表5）。37年の損益計算書の「損失之部」には「日野製糸株切捨、2,480円」とあることから、これらの減資分は企業欠損の穴埋め等に用いられ、山中家には返ってこない無償減資であったといえよう。その後の過程は

12) 同上書、142頁。

13) 前掲『二百六十年史』88頁。また正野家では、木綿事業をより大規模に展開していた大阪支店においても、明治36年9月限りで木綿事業の廃止を決定している（前掲本村論文）。

14) 野田六左衛門家文書「日野製糸臨時株主総会通知」。

詳らかではないが、明治38年5月には、専務取締役であった伊藤甚造が社長となって新たに創業している。おそらく一端解散した後、経営陣を整理して再建したのではないかと推測される。

このような業況悪化した日野製糸に多額の貸金を投じて支えていたのが日野銀行であった。明治34年には京都府舞鶴に支店を開設して事業拡大を図ろうとしたが、同年284,165円あった年間貸金高は、恐慌を経た36年には119,286円へと、まるで日野製糸会社の減資と並行するように減少し、37年99,260円・38年10,028円・39年84,695円へと低迷していった。当座預金貸越高は34年172,219円から37年259,737円へと増加傾向を示すが、38年・39年には1万3千円台へと半減している。預金額も、定期については、明治34年116,443円から37年57,788円へと減少するが、当座については同期間に585,733円から830,458円へと増加傾向を続けている（表6）。これは日野製糸会社と関係ない舞鶴支店の業況を反映しているのかもしれない。

日野銀行はこうした業況不振が続くなか、明治38年には14万5千円余（39年1月の調査で判明）という巨額の欠損を出し、それを補填するために翌39年10万円の減資を行ったが¹⁵⁾経営を立て直すことが出来ず、結局翌1月に近江銀行に合併されている。近江銀行は、伊藤忠兵衛・山中利右衛門・小泉新助・下郷伝平ら有力な近江商人が、明治27年3月大阪に創設したが、日野銀行が設立された同29年には日野支店を開設しており、日野銀行とはいわばライバル行であったともいえよう。

日野銀行はたしかに、34～35年恐慌の影響を受け業況不振に陥っていったが、明治38年に巨額の欠損を出したのは、単なる経営不振にのみ原因があったのではなく、一部役員による背任行為とも思われる「事件」が発生し、訴訟沙汰にも発展したことが打撃をいっそう大きくしたのである。¹⁶⁾今その実態の解明をす

15) 山中家文書「日野銀行解散迄ノ順序取調書」（明治39年1月）。但し、「滋賀県統計全書」の数値では明治39年日野銀行資本金7万円と記されており（表6）、今後さらに確認作業を進めたい。

16) 同上史料。

る暇はないが、こうした不祥事にも見舞われて日野銀行は創業以来わずか10年でその幕を閉じ、近江銀行日野支店として吸収されていったのである。

山中家の日野銀行株は舞鶴支店開設に伴い、35年には34年の13,600円からむしろ20,150円に増加し、恐慌時にあって日野銀行を支えていたのである。この時期日野銀行株は山中家株投資額の約半分を占めるに至っている。だが巨額欠損を出した38年には、10万円減資に伴い、10,125円に減少し、39年には日野銀行消滅とともに姿を消している。

そのほか滋賀県内では、八幡銀行には従来と変わらず372円の株を保持しており、近江鉄道株については、34年に同社が発行した優先株を35株取得して、2,000円～3,000円に及ぶ投資額に達するが、38年には39株・1,950円に整理している。おそらく売却して日野銀行の整理に当てたのであろう。また明治34年から、日野銀行専務取締役を務める大澤兵四郎が取締役に就いた日野運輸会社の株を5株・100円～150円保持している。

京都方面の会社では、社債の項で述べたように京都平安紡績会社は、明治33～34年恐慌で打撃を蒙り、山中家でも34年に同社減資に伴い、持株を33年215株9,375円から34年150株6,500円に減じて2,875円の損失を被っている。その後は明治38年廃業になったため、6,500円の持株も露と消えてしまった。また34年恐慌時には、平安紡績会社が業績不振に陥り、企業銀行から借り入れていた多額の負債が不良債権化したため、企業銀行は、15万円ともいわれる巨額の真宗信徒生命保険会社の預金が支払不能となり、同生保会社の経営にも影響を与えている。山中家は、この時真宗生命株を手放したのである。その後同生命会社は、大正3年、共保生命保険会社に改組されて¹⁷⁾いる。

次に大阪方面の会社株を見てみると、大阪電灯会社は、明治35年の10株・594円をもって消滅している。また明治37年まで3,437円を保っていた大阪百三十銀行株も、38年に1,500円、39年に900円に減少している。百三十銀行も日清戦後

17) その間真宗信徒生命保険会社は大阪生命保険会社からの合併工作に晒されるが、その経緯については、小川功「大阪生命の生保乗取りと日本生命の対応」『保険学雑誌』第516号、1987年3月、を参照。

に過大な融資を行っていた日本紡織会社が、明治37年不渡り手形を出したため一時休業に追い込まれた。その後同行は、日銀や安田善次郎の融資によって救済されているが、山中家の所持株も減資のため38年には前年より1,937円、さらに39年には600円の減少を見ている。

そのほか北海道の2社、即ち北海道函樺鉄道会社と北海道拓殖銀行は、ともに株価を下げずに堅調に推移し、34年2社合計で1,440円から39年には3,400円に上昇している。日本酒造火災保険会社と横浜火災保険会社も合計1,192円を保っていたが、明治38年を以って消滅している。おそらく日野銀行整理に際して処分されたものと推測される。

このように34年～35年恐慌の打撃は大きく、経営不振、減資を余儀なくされた企業の株式が減額、消滅し、最大投資先であった日野銀行が38年に破綻・合併されるに及んで、山中本家の株式所有額はまったく激減したのである。

③貸金

この時期は、明治33年に貸付けられた守村宗米200円・藤岡伝兵衛600円・田中知邦1,000円への貸金が、返金されずにはほぼ踏襲され、38年には、さらに畑治七150円が加わり、39年にはまた外池芳造60円・関谷末吉200円・竹村猪兵衛80円が加わっている。このなかで関谷末吉は日野町の隣村西大路村の商人、竹村猪兵衛は鋳物師村の商人であることが判明している。これらの人物にどのような経緯で貸金をしたのかは詳らかではないが、日野銀行整理の際に、同行の不良債権整理の過程でそのいくつかが山中氏に振り替えられたことも十分ありえよう。

④預け金その他現在金

従来とおり日野銀行への当座預金と観風社への預金が継続して見られるが、36年には2,652円が日野銀行通知預金に振り込まれている。これは35年の記載では、京都平安紡績敷地競売代金とある。他の史料では「平安紡績敷地山中個人ノ資金ヲ以テ買入レ而シテ名義ヲ都合上吉井ノ名義トシタリ」¹⁹⁾とあり、そのため

18) 後藤新一「百三十銀行の破綻」『銀行破綻史』日本金融通信社、1983年、55頁以下

19) 山中家文書「明治三十九年六月五日 重役会ノ要領」。

の資金10,708円余の内訳を記し、競売代金として2,505円を見込んでいる。どのような目論見があって経営破綻した京都平安紡績の敷地を山中安太郎の個人資金で手に入れようとしたのかはわからないが、38年には日野銀行に振り込まれた2,652円余はなくなっているので、平安紡績敷地競売資金に費やされたと思われる。

これについて「明治三十九年六月五日重役会ノ要領」では、「平安紡績之敷地（吉井名義分）5千円位ナレバ売却取斗フ事」とあり、平安紡績敷地購入は、転売して日野銀行の救済資金に当てようとしていたことがわかる。

また39年には、現在金として「日野銀行へ補填出金」44,562円、八幡銀行に3,000円の通知預金、合併される近江銀行の日野支店に通知預金1,500円、小口当座預金2,913円が現れている。平安紡績敷地売却代は、この「補填金」の一部に充当されたか、一時八幡銀行に預けられたのかもしれない。近江銀行への預金は従来の日野銀行への預金を合併される近江銀行に振替えたものと思われる。

さて「日野銀行へ補填出金」として44,562円という巨額支出は、10万円減資に伴って山中家が負担したものであった。日野銀行では、明治38年11月頃より、どの程度の規模で減資を断行し、その負担を誰がどのように受け持つかについて検討を加えており、減資額も5万円、7万円、10万円の3通りのケースが想定²⁰⁾されていた。結局欠損額が予想を超えて大きいことが判明するに従い、39年1月の時点で10万円減資という最も大規模なケースを選択している。そこで決められた損失補填の負担受け持ちは、頭取山中安太郎44,562円50銭、専務取締役辻惣兵衛2,695円（但シ途中ヨリ（前専務大澤兵四郎退職ノ後）就職ノ為大イニ斟酌ヲナシタル結果、僅カノ出金ニ止マル）、取締役竹村太左衛門及び藤沢茂右衛門各6,500円、取締役谷長右衛門6,344円（但シ此人ハ・・僅カ壱千余円ヨリ出金セラレズ遂ニ残余ハ他日ノ欠損ニ計上セリ）、監査役正野玄三6,340円、監査役鈴木忠右衛門27,062円50銭（但シ此方ハ誠ニ徳義ヲ重ンセラレ殊ニ資産トシテモ第一位ニ居ラレ、随テ一般株主ハ勿論預金者ニ至ル迄何レモ大信用ヲ

20) 山中家文書「〔銀行補填金割合書付〕」明治38年11月1日。

持セラレ次第以テ特ニ出金ヲ乞ヒタル次第ニ有之候事²¹⁾），であつた。

このように日野銀行の破綻は、山中家のみならず共同経営者集つた多くの近江商人にとつても多大な負担を強いたのである。

以上、資産の内容を検討してきたが、明治39年（1906）の総資産額63,832円余には、日野銀行補填出金として計上した現金44,562円が含まれており、これを除くと実質の資産は19,270円となることに留意しておきたい。

2. 負債

明治33年時点では、本店借入金を8,600円から10,000円に増やし、善種積立金から700円、主人手元金借用金400円を導入して旺盛な株式投資に当てていたが、34年－35年恐慌に際しては、「本店別回シ口ヨリ一時借入」を2,000円導入し（35年）、36年には大澤兵四郎や藤岡伝兵衛よりの預金を入れている。明治39年日野銀行整理に際しては、本店よりの借用金を2,650円増して12,650円、善種積立金も400円増して700円とし、さらに「本店別回シ口」から24,625円、近江銀行から20,000円の巨額を借り入れて、欠損補填費用に充当しているのである。

資産から負債を差し引いた当期純益金を見ると、明治33年には4,026円を計上していたが、34年には33円余の赤字となり、35年から37年には879円～2,620円台を示すが、これも本店資金からの借入れによって支えられたものであり、実質的な純益とはいえないであろう。日野銀行の破綻・整理の時期である38年・39年にはそれぞれ22,096円、10,430円の赤字となり、これらも本店や近江銀行からの多額の借入れによってなおこの数値に留まっていたということであり、数字に表れる以上に本家の事業経営と投資活動は深刻な破綻状態に陥っていたのであつた。

〔損益計算書〕

「益金之部」を見ると、明治33年には4,643円に達していたが、34年に3,527円に落ち込み、その後35年・36年に4,000円台を回復するものの、37年3,375円、38年3,133円、39年には2,921円にまで下落していった。本店からの田畑所得収入は一貫して1,500円をキープしているが、様々な本店よりの借入れが巨額に上つ

21) 前掲山中家文書「日野銀行解散迄ノ順序取調書」（明治39年1月）。

た39年には打切られている。

公社債利子は34年時には382円あったが、36年以降は75円前後に留まり、株式配当利子も33年には2,686円に達していたが、以後は36年に2,117円を計上したのを除けば、数社にわたる度重なる減資の影響を受けて1,400円～1,700円台に低迷し、39年には374円に落ち込んでいる。貸金・預金利子も35年に277円を計上するが他の年は44円～135円と低額に留まっている。39年のみ八幡銀行や近江銀行への預金が増加した分を反映して495円と高くなっている。39年はまた銀行欠損補填金として株式売却代1,976円が計上されており、こうした分を含めてかろうじて総額2,921円を示していたのである。

「損失之部」を見ると、明治33年には616円に留まっていたが、34年には3,561円に達し、以後も1,300円台、3,100円台を計上し、38年には25,229円、39年には13,351円の巨額損失を示している。本店への利子支払いは、34年683円であったが、本店資金の導入が増すにつれて大きくなり、38年1,191円、39年には1,768円に達している。それにもまして損金を大きくしていったのは公社債並びに株式の売却や減資に伴う損失である。34年には平安紡績減資切捨てによって2,875円の損失を生み、38年には平安紡績・日野製糸・近江鉄道・日野銀行・百三十銀行と減資株切捨てによって24,033円の損失を蒙り、39年も日野銀行補填損失、近江鉄道・北海道函樽鉄道・百三十銀行の減資によって11,581円の損失を計上している。

こうして益金から損失を差し引いた純益も、前述したような低迷または赤字に転落していったのであった。

(3) 明治40年・41年(1907年・08年)

〔貸借対照表〕

まず資産運用において注目すべきことは、明治41年から公社債投資を積極的に開始したことである。すなわち特別5歩利公債及び元京釜鉄道分5歩利公債など、日露戦後政府が推奨した公債への応募に積極的に応えて10,877円の投資

を行い、公社債合計額は前年の1,520円から12,377円に著増している。

これに対し株式投資の総額は、39年7,844円からさらに低下し6,039円～6,139円に留まっている。ただ合併された近江銀行の新株12株・390円や北海道拓殖銀行の新株34株425円を取得するなどの新たな動きも見られた。また京釜鉄道株900円が消滅しているが、この額はそのまま元京釜鉄道分5歩利公債として計上されている。おそらく同鉄道が国有化されたたことによる振り替え措置であると思われる。

貸金では、前専務取締役大澤兵四郎への貸金4,007円が新たに計上されている。これもおそらく日野銀行の不良債権整理の過程で山中氏に振り替えられたものと推測される。また2,450円が日野銀行清算事務所に貸付けられている。

そのほか39年に日野銀行へ補填出金として44,562円が現在金として計上されていたが、回収見込みのない補填代金として用いられたまま帳簿上は現金資産として計上されているのである。帳簿にも「但シ追テ都合ヲ見斗切除スル事」とあり、当分の間の帳簿上の措置であった。こうして資産総額は40年67,590円・41年77,445円を計上するが、これもこの44,562円の日野銀行欠損補填金を含んでのことであり、実情とははかけ離れていることに留意しておきたい。

負債の項を見ると、40年には本店借入金がさらに5,000円近く増額されて17,504円となり、また40年・41年ともに善種積立金が3,900円に上り、39年以来の近江銀行からの借入金20,000円も踏襲して、総額は40年41,404円、41年23,900円の巨額に上っていたのである。

資産から負債を差引いた純益金も40年20,728円、41年23,900円に上っているが、これも日野銀行の損失補填出金44,562円が現在金として資産計上され、また本店や近江銀行からの多額の借金によって支えられていたことからすると、とうてい「純益」の名に値しないものであった。

〔損益計算書〕

「益金之部」を見ると、明治41年に公社債投資の増大を反映してその利子が196円余に上っているほかは、株式配当は283円～312円に、貸金利子も158円

～358円に低迷している。「損失之部」では、本店への利子支払いが1,423円から1,687円へといっそう嵩み、また詳細は不明であるが日野銀行整理の過程で確執のあった前専務取締役大澤兵四郎との関係で土地処分を余儀なくされたため40年1,499円、41年には4,495円の損失を被っている。

さらに明治38年までは恒常的に益金に組み入れられていた本店からの田畑所得金収入も39年以降途絶えていた。こうしたなかで益金の太宗となったのは、40年からまったく新たに登場した「本店ヨリ限度外資本為登金」である。同金は40年23,134円、41年32,676円の巨額に登り、日野銀行の破綻処理過程で疲弊を極めていた本家の資金繰りを救ったのであった。

おわりに

山中家本家は明治30年代、滋賀県日野町において、静岡県御殿場の本店よりの借入金や田畑所得収入（小作料）を元手に、様々な事業に携わり、また株式等への投資活動を行っていった。山中家が直接多くの資金を投じ経営を担ったのは日野銀行であったが、そのほかにも正野玄三が社長を務める日野綿布製織会社や小谷朝永が社長を務める日野製糸会社にも、他の日野町周辺在住の近江商人とともに取締役や監査役として経営参加し、さらに滋賀県並びに京都・大阪の近江商人関連企業や北海道・京浜方面にも手広く投資活動を展開していった。

しかし明治34～35年の本格的な資本主義恐慌は、特に綿紡績業を中心に製糸業、それらと密接に結びついた機関銀行に甚大な影響を与えた。山中家が経営に携わりまた投資していた諸企業も次々に営業中止または減資を余儀なくされ、それらを支えていた日野銀行も大きな影響を被り、明治38年一部経営者の背任行為とも思われる所業もあって多大な欠損を生み、39年に減資などの措置を講じるが、ついに40年から近江銀行に吸収合併されることとなった。近江商人の雄である日野商人達が地元において協力して近代的企業を勃興させ発展させる夢は大きな蹉跌を味わったのである。

この間御殿場の本店からは、様々な形で本家の投資活動やまた減資のための補填のために資金が融通されてきた。特に明治39年の日野銀行整理に際しては、

改めて合計27,675円もの巨額が注ぎ込まれている。だがこの時から従来からの田畑所得金の送金は取りやめになっている。おそらく、本家が日野銀行整理のために必要とする資金があまりに多いため、今後どのような形で、本店および各支店の資本規模を定め、その利益の中からどのような形で本家への資金融通を図っていったらよいかについて、検討が重ねられていったと思われる。また産業革命期に発展していった本店や各支店の資本金の規模を適切に定め、本家への送金のあり方をきちんと定めることが求められていたのであろう。

山中家では明治40年、当主安太郎のほか国元支配人宮尾利兵衛・店惣支配人竹村貴八・店副支配人森村綱吉の連名のもと出店資本金を制定し、総資本額を300,000円、本店貸金業資本30,000円、御殿場本店営業資金55,000円、御殿場支店資本金5,000円、沼津支店資本金10,000円、小田原支店資本金5,000円、伊豆南条支店資本金5,000円、第1予備金40,000円、第2予備金50,000円、本家保管金100,000円と定めた。この制は、翌明治41年から実施することとなった。²²⁾

表7は、明治40年と41年の山中本店において本店—各支店の勘定を総括した総勘定元帳を表出したものである。これによると、明治41年においては前年に定められた出店資本金によって各店の資本金が規定され前年までの低額な規模は改められている。そして貸金、奥過不足金、奥正金からなる総資産から総資本金300,000円を差引いた残金が為登金として計上されている。外記としては様々に積み立てられたり別途蓄積された資金が総括されている。

こうして算定された為登金を本家の『別回シ勘定帳』によって確認すると、表7の明治40年・41年の為登金は表2の損益勘定帳の益金の部に登場する「本家ヨリ限度外資本為登金」と一致することがわかる。40年においても既に総資本額300,000円が守られ、総資産からそれを引いた額が為登金に当てられていたことがわかるが、41年には、本店からの多額の借入れも無くなり、本店からの本家営業部門への資金融通はこの為登金に整理されていったと思われる。

このように、明治40年1月からの日野銀行の近江銀行への吸収合併と同年10月に定められた山中家出店資本金の制は無関係なものではなく、密接な連関を

22) 前掲『二百六十年史』81頁。

有するものであったことが明らかとなった。日野銀行破綻で大きな打撃を被った山中家は、この制によりつつ、以後はより安定した国債投資に資金運用の比重を移すことで活路を見出していったのである。

表7 山中家総勘定元帳（明治40・41年）

単位：円

| | 明治40年(1907) | 明治41年(1908) |
|----------------|------------------|------------------|
| 1.貸金 担保書入 | 22,226.87(68口) | 18,560.679(57口) |
| 無利息割賦済貸 | 16,421.181(54口) | 200,230.043(49口) |
| 計 | 38,648.051(122口) | 38,790.722(106口) |
| 2.奥過不足金不足借 | 84,083.389(12口) | 89,942.463(14口) |
| 過上貸 | 315,170.064(19口) | 290,656.63(27口) |
| 差引計 | 231,086.675 | 200,714.167 |
| 3.奥正金 | | |
| △印正金(出入帳4冊)差引高 | 1,345.334 | 4,667.628 |
| 命店ノ部資本金 | 46,275.072 | 55,000 |
| 同店割済み金残り | | 3,500 |
| ㊸店資本金 | 800 | 5,000 |
| ㊹店資本金 | 800 | 5,000 |
| 同店割済み金残り | | 1,080 |
| 𠂔店資本金 | 1,779.125 | 10,000 |
| 同店割済み金残り | | 1,080 |
| ㊺店資本金 | 1,500 | 5,000 |
| 趣段帳差引不足分貸し | | 2,844.998 |
| ㊻店水車・田地買入金 | 900 | |
| 小計 | 53,399.531 | 93,171.278 |
| 4.合計(1+2+3) | 323,134.257 | 332,676.167 |
| 資本金 | 300,000 | 300,000 |
| 差引 本家へ為登金 | 23,134.257 | 32,676.167 |
| 〔外記〕 | | |
| 趣段帳計 | 8,207.21 | 3,492.537 |
| 田畑小作金諸税金差引収入 | 3,747.172 | 4,620.581 |
| 本家為登金差引高 | 19,831.38 | 16,890.312 |
| △この内渡し分 | 12,908.57 | 11,808.25 |
| 趣段金利子及家賃収入高 | 807.103 | 523.93 |
| 土地売買差引支払高 | 4,016.99 | 9,859.944 |
| ㊼店土地売却銀行預積立金 | 1,472 | 1,596 |
| 5店積立金計 | | 8,950 |

出所：「山中家総勘定元帳」

注：命店は御殿場本店，㊸店は御殿場支店（酒造），㊹店は小田原支店（酒造）

㊺店は伊豆南条支店，𠂔店は沼津支店

（追記）

本稿は、平成15～17年の科学研究費による共同研究「近世・近代における商業資本発達史の研究－近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究－」の成果の一部である